

2014年御嶽山噴火から10年

各主体による被害軽減に向けた取り組み



火山防災研究部門 主任研究員
宮城 洋介

2014年御嶽山噴火による災害

長野県と岐阜県の県境に位置する御嶽山は標高3,067mと、国内の「火山」としては富士山に次ぐ2番目の高さを誇る山です（写真1）。古くは山岳信仰の対象として、近年でも長野県側、岐阜県側の複数の登山口から多くの登山者が訪れる山として知られています。2014年9月27日、行楽日和の週末に多くの登山者が訪れていた御嶽山で噴火が発生しました。山頂付近に多くの登山者がいる時間帯（11時52分）に噴火が発生したため、噴火の規模は小さいながらも多くの登山者が噴火に巻き込まれ、国内で発生した火山災害としては戦後最多の死者行方不明者（63名）を出す大災害となりました。日本国内において人的被害を出す火山災害が極めてまれであったことから、ハード・ソフト両面において多くの火山防災上の課題が浮き彫りになりました。2014年の噴火から10年、地元の自治体をはじめとする各主体が火山災害による被害軽減を目指し、また火山防災上の課題を解決するためにさまざまな取り組みを行ってきました。



写真1 おんたけロープウェイ飯森高原駅から撮影した御嶽山（撮影：吉森和城）

被害軽減に向けた取り組み

御嶽山噴火後、2014年12月に周辺自治体に加えて地方气象台や防災関係機関、有識者などによって構成される御嶽山火山防災協議会が設立されました。火山防災協議会では、御嶽山における登山者・観光客の安全確保対策の検討がなされた他、ハザードマップの改訂や各自治体による火山防災マップの作成が行われました。2016年には御嶽山火山防災計画が策定され、その後も現在に至るまで繰り返し改定されています。また火山防災協議会では、毎年御嶽山噴火を想定した防災訓練が実施されてきました。訓練を通じて、噴火発生時もしくは噴火警戒レベルが引き上げられた際の対応が見直され、また関係機関間の連携の円滑化が図られてきました。他にも2017年には、御嶽山で火山防災に関する知識の普及・啓発を行う御嶽山火山マイスター制度の創設が提案されました。初年度に8名のマイスターが認定され、その後も毎年数名のマイスターが誕生しています。マイスターとなった方々は火山防災に関する普及・啓発活動のみならず、御嶽山の魅力を発信するなど幅広い活動を続けています。

上記のようなソフト対策に加えてハード面での対策も実施されてきました。一つは、2014年の噴火では山頂付近で噴石から身を隠す場所がほとんどなかったことから、山頂付近に複数のシェルターが設置されました（写真2）。また、既存の施設（山小屋）の一部についても、改修や改築、補強が行われました。さらにこれらの施設にはヘルメットなどの安全対策用品が配備され、緊急時に備えて防災行政無線用の屋外スピーカーが設置されました。他にも、2022年に山麓域2カ所に

ビジターセンター（さとテラス三岳、やまテラス王滝）が開設され、普及・啓発活動の拠点としても利用されています。



写真2 剣ヶ峰山頂下に設置されたシェルター（撮影：上田啓瑚）

一方、文部科学省は2016年より全国の大学、研究機関が参加する「次世代火山研究・人材育成総合プロジェクト」をスタートし、さまざまな分野との連携・融合を図り、火山に関する観測研究・予測研究・対策研究を一体的に推進し、同時に広範な知識と高度な技能を有する火山研究者の育成を行ってきました。御嶽山においては対策研究の一環として、2014年噴火時に浮き彫りになった登山者の動向把握や関係機関間の状況共有といった課題の解決を目的とした実証実験（御嶽山チャレンジ）を2022年と2023年に地元自治体と連携して実施し、結果は自治体による火山防災対策や火山防災協議会による防災訓練に活用されました（写真3）。



写真3 御嶽山チャレンジ2023の結果を活用して実施された御嶽山火山防災協議会防災訓練の様子

2014年の噴火以降、気象庁や大学による御嶽山の監視・観測体制も強化され、地震、地殻変動、空振、地磁気、火山ガスなど御嶽山の活動評価に資するさまざまな物理量を計測する機器や監視カメラが新たに設置されました。また2016年、御嶽山の火山防災対策の強化を図る目的で名古屋大学御嶽山火山研究施設が開設され、火山の専門家が御嶽山の麓に常駐し自治体などの火山防災への取り組みを支援する体制が整いました。そして2024年4月には、2023年の活火山法の改正に伴い文部科学省に「火山調査研究推進本部」が設置されました。これにより御嶽山周辺の観測点がさらに増設される他、火山に関する観測、測量、調査および研究が政府を中心に一元的に推進されることで、御嶽山をはじめとする全国の火山における火山防災対策がさらに強化されることが見込まれます。

噴火から10年

本年（2024年）9月で、御嶽山は2014年の噴火から10年の節目を迎えました。ソフト・ハード両面での火山防災対策が着実に進められてきたことで、御嶽山では登山道の規制緩和が可能となり、近年登山者が戻りつつあります。特に、2023年には噴火以来約9年ぶりに八丁ダルミの規制が緩和されたことで、王滝口登山道から剣ヶ峰山頂まで登山者が登れるようになったことから、多くの登山者が朝早くから田の原駐車場に集まり、新しいビジターセンター（やまテラス王滝）を利用するなど登山を楽しむことができるようになりました。

10年前に痛ましい火山災害に遭った御嶽山は、その後の10年間各主体による取り組みを通してさまざまな火山防災上の課題を解決してきました。こうした経験や知見は、日本国内に数多くある、登山者が登ることのできる火山における火山防災を考える上で大変貴重なものであり、「火山防災協議会等連絡・連携会議」などの内閣府による取り組みを通して他火山の火山防災協議会と共有することで、日本の火山防災を一步も二歩も進めることができるのではと期待しています。